

経済的負担が 少ないことが必要

病棟で子どもの入院に付き添うとき、自宅に残る家族と付き添い家族の生活との二重生活になり経済的負担が増加します。また、付き添う家族は家のような生活の拠点が無いので「帰るところ」「食べるもの」を確保することからはじめなければなりません。

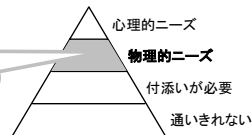
食べるものは、病院の売店、近くにお店があればお弁当やお惣菜を買うか、外食が続きます。

住むところは、病棟に付き添うことができれば、ベッドサイドに簡易ベッドを借りて寝泊りします。基準看護で病棟に付き添えない場合はホテルやウィークリーマンションに宿泊します。長くなることを考えると、アパートを借りたほうが安いかもしれません。自宅へ帰ることができたとしても、毎日の交通費の負担は軽いものではありません。

目の前からどんどん消えていくお金の心配をしながら、子どもの治療に向き合うことは大きな不安をとまいます。

ハウスへの物理的ニーズ

経済的負担が少ないことが必要



地元の基幹病院で治療していたときは病棟に付き添えるのはひとりまで。祖母と母とが交代でつきそっていただけ、駐車場に車を止め、車中で交代で休んできたが駐車料金が1日1,000円かかる。車で寝てるのに月に3万円かかるなら、と思って病院近くのアパートを借りた。

(ハウス利用者)

自宅から病院まで高速道路を使うと1時間で通えるが片道1,600円かかる。加えてガソリン代もかかると思うと、毎日通えない。自分は家族と離れ、病棟に泊まっている。

(病棟付添い家族)

すぐに病院に 駆けつけられることが必要

子どもの入院中、そのほかに特別な用事がない限り、毎日、病棟で付き添います。病状に変化がないか、今日のご飯を食べられるのかと、心配の種は尽きません。しかし、そばにいて、顔を見ていれば伝わるものがたくさんあります。

夜間に病棟で付き添いができない場合、毎日、病棟と滞在場所を往復することになります。移動の負担は経済的、身体的な負担だけではなく、家に残してきた家族の心配も含め精神的な負担も大きいものになります。

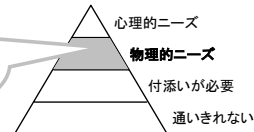
治療と治療の合間に外泊許可がでて、移動の負担を考えると長い時間の移動は難しいし、もし、体調が悪くなってしまったときにすぐ病院に戻れる距離にいないと心配になります。子どもの病状や家族の置かれた状況によって、「通える距離」が「通いきれなくなる」こともあります。

いざというとき、すぐに駆けつけられると思えるから、不安が軽くなり、ゆっくり休んだり、気分転換ができるのです。

ハウスへの物理的ニーズ

すぐに病院に

駆けつけられることが必要



手術後1日は病院から30分以内のところで待機するよう医師から指示され、自宅には戻れなかった。

(ハウス利用者)

ハウスの利用の申込を受ける際、病院から30分ほどかかることを伝えると、「それなら病棟に付き添います」という方が多い。

(ハウス運営者)

母親が疲れている様子がわかるので「家族のだれかと交代してもらったら？」とはなしても、「子どものそばを離れることのほうがストレスになるから」という母親が多い。

(小児科看護師)

ターミナルのときには多人数の付き添い希望がある。いつもは苦にならない移動時間も大切な時間。とても遠く感じられるものになる。近くなければ意味がない。

(小児科医師)

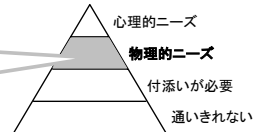
衛生的であることが必要

小児がん治療中や移植手術後、免疫が低い状態になります。インフルエンザや麻疹・水疱瘡など、子どものときにだれでも罹る感染症が命を脅かしたり、健康であれば怖くはないカビなどの細菌に感染したり、風邪など一般的には軽い感染症でも、治療計画の変更が必要になるなど治療中の子どもに大きな影響を与えることとなります。そのように治療中に免疫が低くなるような病気の治療に付き添う場合、感染症に罹ると病棟に入ることができなくなってしまう。

病気の治療中に外泊許可がでて子どもと家族がハウスを利用することがあります。病棟を出られるくらいには体力が回復していますが、感染症への配慮は必要です。

ハウスは病棟ではないので一般的な家屋として衛生的であることが大切です。しかし、感染症への心配を抱えている人も安心してゆっくと休むために、感染症への対策やかびやほこりなど、ハウスだから特に注意しなければならないことがあります。

ハウスへの物理的ニーズ
衛生的であることが必要



外泊許可がでている子どもは、病棟を出られる子ども。家として衛生的であれば十分だけれど、ほこり、カビには気をつけなければいけない。

(小児科看護師)

